

～すてきなあなたへ～

## 今も輝くスター55 (3)

～オーソン・ウェルズ～

映画史を語るにもう一人、このスターを忘れてはならない

### デビューからとびきりの大物

オーソン・ウェルズといえば、私がまず思い出すのは『第三の男』(49)。それも彼が演じるハリー・ライムが、たそがれ時の遊園地の大観覧車の向こうから足早に現れて、はるばるアメリカからやってきた親友のホリー・マーティンス(ジョゼフ・コットン)と久方ぶりに再会するシーン。あとき彼が親友を見つめて浮かべた、少年のようにいたずらっぽく、しかも不敵な微笑を、私は今も忘れられない。

原作はイギリスの作家グレアム・グリーン、監督は同じくイギリスの名匠キャロル・リード。舞台は第2次大戦直後の荒廃のウィーン。ハリーは金もうけのため闇市場に粗悪なペニシリンを流して、多くの人を死に追いやっている極悪人なのだ。そうとも知らず懐旧の思いにあふれて訪ねてきたホリーだが、やがて真相を知ると友情を捨て、最後にハリーを地下水道まで追いつめて打ち殺すというストーリー。シンプルなストーリーだが、サスペンス・スリラーの傑作である。全編を貫くサスペンスに、ハリーを愛し続ける女・アンナ(アリダ・ヴァリ)がいる。彼女の心を理解しながらも、彼女をひそかに愛してしまうホリーの報われぬ心情をからめ、恋愛ドラマとしても秀逸だった。この映画を何度見たか。アンナがホリーには目もくれず、枯れ木の並木道に行く秀逸なラストシーン。アントン・カラスのツイッターが今だに心を締め付ける。どの部門にも“傑作”の文字がつく。

### スタートは「市民ケーン」から

不敵な微笑といえばもう1本、『市民ケーン』(41)。権威あるアメリカのフィルム・インスティテュートが定期的に発表する「世界映画の歴代ベスト100」で、必ずといっていいほどベスト1に選ばれるのが『市民ケーン』。製作・監督・脚本(共同)・主演のこの作品を撮ったときオーソン・ウェルズは26歳。ここでも彼は、どこか少年っぽい不敵な微笑を絶えず浮かべていた。

ストーリーは、新聞王としてアメリカの政界・財界にまで権力を振るったケーン(オーソン・ウェルズ)が年老いて孤独のうちに死んでいく。新聞社は、生前の彼の实写フィルムを編集し、長編ドキュメンタリーを作ろうと企画するものの、あまりの矛盾に満ちた彼の生き

方に音を上げてしまう。そこで手法を変え、取材記者がケーンの素顔をよく知る人々を訪ね歩き、真のケーンの間像を探り出そうとする、という展開。

しかしケーンが死にぎわに口にした<バラのつぼみ>という謎の言葉の意味はついに解明できず、取材記者は失意のうちに最後の取材地だったケーンの豪邸を去っていく……。だがそのとき、邸の執事が不要な遺品として暖炉に投げ込んだ子供用の雪ぞり板、その板にはっきりと商品ブランドの<バラのつぼみ>の絵が印刷されているのだ。だが、暖炉の炎に燃え尽きていく<バラのつぼみ>を目撃できたのはこの映画の観客だけ。ケーンの間像の解明に大きなヒントを与えられたのは観客だけだったのである。複雑な構成だが、ケーンがどんなに愛を求めていたかを理解したとき、観客は胸を締め付けられるだろう。人間の幸福度は、金ではなく心で測るものだと教えられた気がした。

ケーンは雪深い山で小さな宿屋を営む家庭に生まれたが、ある鉱山採掘者が宿賃を払えず、代わりに置いていった鉱山の採掘権利書が、思いもかけず莫大な利益を生み、教育熱心な母親は少年ケーンを都会の学校に入学させる。少年の頃ケーンがよく遊んでいたのが<バラのつぼみ>印の雪ぞり板。つまりケーンは幼い日に突然母の愛を断ち切れ成長したのだ。彼の複雑な人間性はそこから生まれたのだということを、映画は無言のうちに観客だけに告げて終わる。脚本を書いたのはオーソン・ウェルズ自身（もう1人の脚本家ハーマン・J・マンキーウィッツと共同にはなっているが）。この少年の日のケーンの姿には、オーソン・ウェルズ自身の少年時代が投影されているのではないかと、私は思う。

### 少年っぽい不敵な笑み

190 cmの長身に独特な風貌のオーソン・ウェルズは1915年5月6日、アメリカ・ウィスコンシン州ケノーシャの裕福な家庭の生まれ。父は発明家（一説にはアルコール依存症の奇人だったとも）で、母はピアニストだったらしいが、6歳のとき両親が離婚したため母に引き取られ育てられた。ところが9歳のとき母が亡くなり、父のもとへ。父の母親つまり祖母はオカルト狂で、オーソンとは犬猿の仲だったという。いずれにせよオーソン・ウェルズはケーンと同様、母の愛を十分に享受することなく大人になった——と考えられる。母の愛はもちろんのこと、両親の愛、幼少期の愛の享受が人間形成に大きな影響を及ぼすものだと、いまさらながら思わざるを得ない。

その後の作品「審判」(63)「上海から来た女」(47)「オーソン・ウェルズのフェイク」(75)に至るまで、どれも平和な家庭でぬくぬくと育った人間にはない、世の常識への反逆精神に満ちあふれている理由がよくわかる。そして同時にそれらの作品の裏に、私はあのハリ・ライムの少年っぽい不敵な笑みを見てしまうのだ。

監督はせず、俳優としてだけ出演した作品もゆうに30本を超えるが、初期の「第三の男」や「ジェーン・エア」(44)、「離愁」(46)などを除き、ほとんどが助演級なのはハリウッドが彼の強烈な個性をほしがりながら、一方では敬遠していたせいでもあろう。

ついでながら、「市民ケーン」はアカデミー賞の作品、主演男優（オーソン）、監督（オー

ソン)、オリジナル脚本(オーソン他)、撮影、室内装置、録音、編集、音楽の9部門でノミネットされながら受賞できたのは脚本のみ。ケーンモデルになった実在の新聞王ランドルフ・ハーストの圧力がハリウッドにかけられたせいだと言われるが、それもいかにもオーソン・ウェルズらしいエピソード。その代わり彼は70年に<映画創造の最高度の才能>を讃えられて名誉賞のオスカーを受けとっている。85年10月10日、心臓発作で世を去ったが、残念ながら、<バラのつぼみ>のような謎の遺言はなかった。

オーソン・ウェルズはすでに10代の頃から演劇界の雄となっていた。俳優であり演出家としてその才能は並外れていた。ジョン・ハウスマンと組んで<マーキュリー劇団>を主宰。シェークスピアを新解釈で演じたり、斬新かつ活発な活動を続けて注目される。さらにラジオでは<火星襲来事件>を起こす。CBS ラジオをネットワークに「マーキュリー劇場」という番組があり、それは小説や演劇を短編ドラマ化して放送するもの。1938年10月30日放送したのはH・G・ウェルズの「宇宙戦争」。宇宙人が攻めてきたという内容だが、目撃者の話も入れたりして、その作り方があまりにリアルであるため、視聴者は実際のニュースだと勘違いしてパニックを引き起こしたというもの。そんな社会的現象までを起こしたこの天才をハリウッドがほっておくはずはなく、RKOに招かれ『市民ケーン』の製作を任されたというのが映画界での始まりだったのである。結婚は3回。

#### <菅沼正子>

映画評論家。静岡県生まれ。著書に「女と男の愛の風景」「スター55」「エンドマークのあとで」。1972年第45回アカデミー賞、1973年第46回アカデミー賞を記者席で取材。NHKラジオ深夜便で「菅沼正子の思い出のスクリーンメロディ」を2002年から2005年まで担当。地域のミニコミ誌「すてきなあなたへ」(佐倉市)の終刊2015年まで「菅沼正子の映画招待席」を執筆。